

イエシュアによる律法の解釈 (3)

【聖書箇所】 マタイの福音書 5章 33~37節

ベレーシート

●マタイの福音書 5章 21節からイエシュアによる律法の解釈が語られていますが、その語り口は「対立命題」という、それまでの口伝律法の解釈を否定する形で語られています。今回は右図にある六つの戒めのタブレットのうち、第四番目の「誓い」について取り上げます。



「誓い」「宣誓」「誓約」「聖願」と言うとな何を想像するでしょうか。私たちのまわりにはこれらの言葉に係る場面としては、結婚式、裁判、競技大会、あるいは職務の就任、加入式・・・などを思い浮かべます。そこで求められる誓いは、誠実な思いをもって自分の責任を果たすことを表明するものです。誓いを破れば、何らかの痛み、不利益、報い、ペナルティ(罰)が科せられることは当然です。

●今回のイエシュアが、「誓ってはならない」という場合の「誓う」のヘブル語は「シアーヴァ」(שְׁבַע)です。その言葉を調べてみると「誓う」ことはとても重要な事柄として取り上げられています。「シアーヴァ」の初出箇所は、創世記 21章のアブラハムが滞在先のゲラルの王アビメレクに対して誓った箇所です。その誓いの内容は互いの友好関係を築くためのものでした。22章 16節では、神がアブラハムに対してご自身にかけて誓っていますが、それは神のアブラハムに対する約束です。

●ちなみに、訳語の語句辞典(コンコルダンス)で「誓う」という言葉を調べると、初出箇所は創世記 14章 22節です。そこには、「すべての財産はあなたが取ってください」と言うソドムの王に対して、アブラムが「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う」とあります。その誓いの内容は「糸一本でも、くつつひも一本でも、あなたの所有物から私は取らない。それは、あなたが『アブラムを富ませたのは私だ』と言わないためだ」というものです。しかし、ここでのアブラムの「私は誓う」は「シアーヴァ」(שְׁבַע)という動詞はなく、原文直訳では「(主に向かって)私の手を上げた」という動作を表す表現になっています。その行為を「誓う」と訳しているのです(創世記 14:22)。アメリカ映画などで観る裁判での誓いにも同じ動作をしますが、この箇所から来ているのかも知れません。

●創世記の中に見る「誓い」の例として、**人と人との関係の例**では、アブラハムに対するしもべの年長者エリエゼルの誓い(24:3, 7, 9, 37)、ヤコブに対するエサウの誓い(同 25:33)、イサクとアビメレクの互いの誓い(26:31)、ラバンに対するヤコブの誓い(31:53)、イスラエル(ヤコブ)に対するヨセフの誓い(47:31)、ヨセフに対するイスラエルの子らの誓い(50:25)。**神と人との関係の例**では、アブラハムに対する神ご自身の誓い(22:16、26:3)、アブラハム・イサク・ヤコブに対する神の誓い(50:24)があります。

1. 「決して誓ってはいけません」の真意とは

(1) 誓いの方向

●このように、「誓いを立てる」ことはとても素晴らしいことです。聖書の中には、エサウがヤコブにした誓いのように、その場限りという誓いもありますが、大方はその誓いに責任をもっているのが分かります。神が「誓う」場合には決してその誓いは反故にされることはなく、やがては必ず実現されます。その意味ではとても励まされます。しかし問題なのは、人が神に対して誓う場合です。イエシュアはこのケースを問題だとして、はっきりと「誓ってはいけません」としているのです。

●ここで今回のメッセージとなる聖書のテキストを読んでみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5章 33～37節

33 さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』と
言われていたのを、あなたがたは聞いています。

34 しかし、わたしはあなたがたに言います。**決して誓ってはいけません。**

すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。

35 地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。
そこは偉大な王の都だからです。

36 あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。

37 だから、あなたがたは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上のことは
悪いことです。

●33節の『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』という部分だけを読むと、「尤(もっと)もだ」と思いませんか。あまりにも当然のように思えます。伝道者の書 5章 4節にも以下のよう
に記されています。

【新改訳改訂第3版】伝道者の書 5章 4～5節

4 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。神は愚かな者を喜ばないからだ。
誓ったことは果たせ。

5 誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。

●『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』という戒めに対するイエシュアの言い分は、「決して誓いを立ててはならない」というものです。この対立命題はヤコブの手紙でも全く同様のことが書かれています。

【新改訳改訂第3版】ヤコブの手紙 5章 12節

私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしなさい。天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」としなさい。それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。

●ヤコブの手紙の「何よりもまず、誓わないようにしなさい。」とあるのは、あらゆる「誓い」に対して「誓わないようにしなさい」という意味ではありません。神に対する軽率な誓いに対して語られているのです。自分の神に対する誓いを権威づけるために神を指して誓うことを戒めていることばなのです。

●神に対して「偽りの誓いを立ててはならない」とするならば、神に対して「真実の誓いを立てる」ことが勧められているのかと思えば、決してそうではなく、イエシュアは「決して誓いを立ててはならない」と否定しているのです。

●モーセの律法のレビ記 19章 2節には「わたしの名によって、偽って誓ってはならない。」とあります。「偽って誓う」「偽りの誓いを立てる」という場合の「偽りの誓い」とは何でしょうか。それは、**誓った事柄がすみやかに実現できない誓いのこと、軽率な誓い**を意味しています。そのような誓いを「偽りの誓い」と言い、そのような誓いを「立てる」ことを禁じているのです。もし誓うならば、それは必ず守らなければなりません。もし守れなければ、神のさばきを招くからです。神はご自分の語られたことをすべて完全に実現できる方です。しかし人間は、誓ったことをすべて完全に実現することはできません。それゆえ人間が**神に対して誓う**ことは、最初から実現できないのも同然なのです。だとすれば、たとえ主の御名によって誓ったとしても、結果としては、偽りの誓いとなってしまいます。ですからイエシュアは、「決して誓ってははいけません。」と語っているのです。

●人と人との関係における「誓い」は、それぞれ自分の責任においてなされなければなりません。結婚式の誓いとか、競技大会での誓いはそうです。しかし、神に対する人の誓いは初めから偽りの誓いとなる運命にあるのです。

●イエシュアの時代の律法学者やパリサイ人は、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』と教え、神に誓ったことは実現できなければならないという教えを大切にしてきたのです。ところが、長い歴史の中で、誓いを軽々しく行って、誓いを悪用したり、それを破ったり、取り消さなければならない状況が起こって来たのです。そのため、その状況に対処する様々な方法を考えるようになって行ったのです。つまり、「主の御名」を別の言葉に変えることで、逃れの道考えたのです。その例をイエシュア自身が語っています。マタイ 5章 34～36節を見てみましょう。

34・・・天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。

35 地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。

そこは偉大な王の都だからです。

36 あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。

●「主の御名」ではなく、「天」「地」「エルサレム」「頭」を引き合いに出して、それを指して誓うならば、たとえ自分が誓ったことが実現できなくても、神のさばきを免れると考えたのです。しかしイエシュアはどの言葉を引き合いに出して誓ったとしても、すべて神に対して誓っていることになり、さばきは免れないとしたのです。同じことが、マタイ 23 章 16～22 節でも扱われています。目を通しておきましょう。

【新改訳改訂第 3 版】マタイの福音書 23 章 16～22 節

16 わざわいだ。目の見えぬ手引きども。おまえたちは言う。

『だれでも、神殿をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、神殿の黄金をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』

17 愚かで、目の見えぬ者たち。黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか。

18 また、言う。『だれでも、祭壇をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、祭壇の上の供え物をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』

19 目の見えぬ者たち。供え物と、その供え物を聖いものにする祭壇と、どちらがたいせつなのか。

20 だから、祭壇をさして誓う者は、祭壇をも、その上のすべての物をもさして誓っているのです。

21 また、神殿をさして誓う者は、神殿をも、その中に住まわれる方をもさして誓っているのです。

22 天をさして誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方をさして誓うのです。

●律法学者やパリサイ人は、神への誓いを「・・をさして(新共同訳では「・・にかけて」)誓ったなら、何でもない(新共同訳では「無効である」)という方法で逃げ道を作っていたのです。しかし、神に対する誓いをすることは、たとえ御名を指して誓わずとも、すべて神を指して誓っていることにほかならず、神のさばきは免れることはできない、「忌まわしいものだ。」とイエシュアは律法学者やパリサイ人たちを断罪しています。

(2) 神に対する誓いの内容

●律法学者やパリサイ人たちが誓いを立てた内容とはどういうものだったのでしょうか。マタイ 5 章のテキストにはその誓いの内容については記されていませんが、律法学者やパリサイ人たちが人一倍、立派に生きようとしていた人であると考えれば、その誓いの内容はおのずと想像できます。ユダヤ教では 613 の戒めを守ることで、救われると考えられていました。その 613 の内の 248 の律法は、積極的にしなくてはならないことを命じています。そして、365 の律法はしてはならないと禁じられていたものでした。それだけのものを覚えるだけでも大変であり、それを実行することも大変です。律法学者たちや厳格なパリサイ人たちはそれを人一倍実行しようとした人たちでした。

●ここに一つの光景があります。パリサイ人と取税人がともに祈っている場面です。ここではとりわけパリサイ人の祈りに注目してみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】ルカの福音書 18 章 11～12 節

- 11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』
- 12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

●このようなパリサイ人が、もし神に誓いをするとすれば、おそらくより高いレベルのことを神に誓うはずで、しかし果たしてその誓いを実現することができるのでしょうか。もし、私たちが神に向かって、「今日から聖書を毎日読むことにします。旧約を2章、新約を1章読み、一年間で全部を読めるようにいたします。」と誓ったとします。どうでしょうか。神に誓ったのですから、実行できれば素晴らしいことです。しかし反対に誓ったことで苦しまないでしょうか。「一日一善を行ないます」と神に誓ったとすれば、その誓いは必ず守らなければならないのです。それはとても良いことですが、それとは反対の力が自分の心に働きはじめめるのです。

2. なぜ、誓ってはならないのか

●ところで、イエシュアはなぜ「決して誓ってはなりません」と言ったのでしょうか。この真意を知るために、律法学者であり、パリサイ人であった使徒パウロの叫びと彼に啓示された福音を知る必要があります。パウロの叫びとは以下の通りです。

【新改訳改訂第3版】ローマ書7章15～24節

- 15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。
- 16 もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。
- 17 ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。
- 18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
- 19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。
- 20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。
- 21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。
- 22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでるのに、
- 23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
- 24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

●神に対する誓いは、神のみこころに対して「・・することを私はいたします」という誓いです。とすれば、パウロのようなことが起こるのです。異なる二つの原理(法則)があって、神のみこころにそった誓い

を果たそうとすればするほど逆の原理(=罪の原理)が働くのです。この葛藤にパウロは叫びを上げました。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

●と同時に、神が賜物として私たちに勝利をもたらしてくれる原理があります。それは「御霊の原理」と言われるものです。その「御霊の原理」は、御霊がすべて神のみこころを私たちのうちに実現させるために与えられているものです。その御霊が働くためには、まずイエシュアを信じる者のうちに御霊が与えられるという事実です。この事実について、私たちは信仰によって、「はい」と言わなければならないのです。「御霊の原理」も「罪の原理」もいずれも法則です。私たちの意志や頑張りとは関係なく働き続けている力です。たとえば、「引力の法則」がそれです。私がこの聖なる書物、すなわち聖書を持ち上げるとします。この持ち上げようとする力は私の意志です。しかし引力の法則は、つまり私の意志とは関係なく下へ落ちようとする力が働きます。別に私がそれを落とす必要はありません。黙っていてもやがて手が疲れて下に落ちるのです。問題は、意志と法則が争う時どちらが勝つかということです。普通は、最初、意志が勝つかのように見えます。私は自分の意志で聖書を持ち上げていますから、落ちることを許しません。私の意志が勝っています。しかし一時間そうしていると、不安が襲ってきます。だんだん手は重くなってきます。聖書が重くなってきているわけではありません。それを持ち上げている手が疲れて来て、重く感じているのです。それを一日中持ち上げていなさいということになれば、結果はどうなるでしょうか。火を見るよりも明らかです。このことについて、私たちは「はい」と言わなければなりません。

●引力は私の意志で持ち上げている間もたえず働いています。法則は決して疲れませんが、私たちの意志は疲れるのです。頑張れば頑張るほど、引力の力は大きくなるように感じるのです。そして、ついに私の意志はこの法則の力に完敗してしまうのです。パウロは最初、罪が法則であることに気づきませんでした。ですから、彼は自分の意志で頑張ったのです。ところが彼は罪が法則であることに気づきました。おそらく、律法が法則・原理と同義だと気づいた最初の人ではないかと思います。啓示されたと言った方が良くもありません。善をしたいと思えば思うほど、自分の内に働く悪、つまり罪の法則があることを知らされたのです。善をしようとするほど、それにぴったりと寄り添うかのように罪の力も働くのです。しようとするほどです。なぜなら、そこに働くのは法則だからです。このことも私たちは「はい」と認めなければなりません。平和な世界を打ち立てようとして頑張れば頑張るほど、反対に「平和のための争い」が起こってくるようなものです。

●ここで注目したいことは、「**こういうわけで、なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の原理が、罪と死の原理からあなたを解放したからである**」(8:1,2)というみことばです。このパウロの宣言に対して、私たちがすべきことは、信仰によって「はい」と言うか、それとも不信仰に対しての「いいえ」だけなのです。それについての弁明は要りません。神が私たちにしてくださったことに対して、あるいは、神のことばに対する「はい」は勝利をもたらし、不信仰に対する「いいえ」も勝利をもたらします。神に誓って自分の力で頑張ることを神は求めていません。なぜなら、「肉の思いは死」であり、「御霊の思いはいのちと平安」だからです。信仰の「しかり」と不信仰への「いいえ」があればそ

れで十分なのです。神に対する「しかり、そのとおり」だけでなく、「いいえ」も神の真実を裏打ちしているからです。たとえば、「私は心配しません」「恐れませんが」、神に対する信頼への表現だからです。

●「はい」は英語で Yes! ギリシア語では「ナイ」(ναι)、ヘブル語では「ケーン」(כן)です。アシュレークラスに参加されている 82 歳になる女性 N 姉が、私の連絡メールに対して、כן という一語で返信して来られました。フルにヘブル語を使おうとしておられるのです。こんなやりとりができるなんて感動です。また不信仰を誘導する力に対してはきっぱりと断言的に「いいえ」です。ちなみに、「いいえ」は英語では No! ギリシア語では「ウー」(ού)、ヘブル語では「ロー」(לא)です。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8 章 1 節

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

●このみことばに堅き立ち、解放と信仰をもって「はい、然り」と言い、御父が御子イエシュアを通してしてくださったすべてのことについて知り、かつ学びながら、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」と明確に言えるような信仰で生涯を歩みたいものです。これが今回、イエシュアが私たちに語ろうとしているメッセージなのです。

2017.6.11